

家庭学習応援教材

小林秀雄「信楽大壺」を読む

青山学院大学 経営学部 2013 過程の演習 新国語問題集アシスト19集【現代文編】3

次の文章は、小林秀雄「信楽大壺」の一節である。よく読んで後の問に答えよ。

例えば、今、誰かが私に、こんな質問をするとする。君はずいぶんいろんな焼き物を見て来たようだが、どんな焼き物が一番好きか、と。なるほど、質問はひどく曖昧だが、そんなことは気にかけず、私は、ほとんど本能的に、自分が毎日晩酌で使っている徳利とか盃とかのうちらから選ぶとうとするだろう。これでは、焼き物が好きなのだか、酒が好きなのだか解らぬということにもなりそうだが、本当を言えば、そんなものかも知れないので、私は、そんな気持ちで、この徳利が一番好きだと言っているらしい。一番好きな焼き物は、私が一番見てはいないものだ。

焼き物は、見るものではない、使うものだ。これは解り切った話だが、私の経験では、解り切った話を合点するのは、手間がかかった。いい盃だと思つて買つて来る。呑んでいるうちに、いやになる。今度は、大丈夫だろうと思つて買つて来る。なるほど、呑んでいても欠点は現れて来ない。だが、何となく親しめない。そのうちに、誰かにやつてしまふ。そんなことを、長い間、くり返してきた。これは単に個人の趣味の問題には止まるまい。酒好きの焼き物好きが、みんなやっていることである。実に沢山の人が、実に長い間、呑んでいるのだから判然としない、そういう経験を重ねてきた。焼き物の美しさは、基本的には、この種の経験の上に立っている、と私は考えている。

私は、茶事には不案内であるし、無関心でもある。しかし、万事につけ、人の意識とか関心とかいうものの力は、当人の思うほど強いものではない。やはり、伝統の沈黙の力は、いつも働いているものだ。私の母親は、生前、茶道の師匠をしていた。私が、これにどんなに無関心だったとしても、母親の思い出は、私の心のなかで、死なないようなもので、今日、どんなに当世風な焼き物の鑑賞の仕方を、意識的に試みてみても、私たちが、長い間育てて来た焼き物の美しさを扱う態度は、日本の焼き物好きの心のなかで、死にはしない。言うまでもなく、この態度は、茶道によって養われて来た。茶道の形式化や墮落を言うのは易しいし、つまらぬことだ。それより、茶道が実行してきた信条、器物を使う道が即ち器物の美しさを知る道であるという信条、これには、まことに自然な動かし難いものがあることを考える方が興味がある。

恐らく、そこには、誰も究めたことのない美学がある。と言うより、言葉なく、理論なく、焼き物の姿が人間に要請している美学に、人間が随順し、これを知らぬうちに実践して来たと言った方がいいかも知れない。

例えば、この茶碗は、味がいいとか、味が悪いとか言う。焼き物好きには、この言葉が、はっきりとある具体的な感覚を指している以上、実に解り切った易しい言葉だが、さてその具体的な感覚とは、どういう性質のものかとなれば、言葉に窮するであろう。しかし、これが、どうやら、焼き物を使つてみているうちに育つて来るある感覚であることは、間違いないように思われる。焼き物好きは、いつの間にか、触覚に基づいて視力を働かすようになっていく。陳列棚の焼き物も、ガラス越しに、触るように見ているものだ。私は、絵を見ていく時など、よくこれに気が付くことがある。特に、極端

にこちらの視覚を要求しているような絵に出会う時、焼き物に親しんで来て、私が知らぬうちに育成してきた自分の視力の性質、自分の謂わば極端に触覚的な視力に、突然気づいて驚くことがよくある。

彫刻は、眼前に実体があるという点で、直接な実体感を基本として、これに接しなければならぬという点で、絵という外観の世界とは比較にならぬほど焼き物に近いものだ。しかし、彫刻の実体感は、焼き物の実体感のように純粋な形式をとることはむづかしい。彫刻は、やはり、何を表現しているかという質問、私たちの言葉に訴える質問を蔵しているからだ。そこへ行くと、焼き物は、まことに気が楽だ。何にも表現していない。私たちは焼き物を前にして、純粋な実体感のうちに、言葉を一番挑発し難い触感の世界に安住することが出来るようだ。触覚という感覚は、私の感覚のうちで一番基本的な感覚に違いないという気さえ起こさせる。

この焼き物の持つ、言わば私たちの言葉の世界への全くの無関心が、私たちを焼き物の使用に誘うのではあるまいか。焼き物の「味」という言葉を、私たちが思いついた所以も、その辺りの事情から来ているのではあるまいか。私たちは、焼き物を味わう。焼き物が要求している私たちの視覚とは、私たちの触覚から分化したものに過ぎない。焼き物に対しては、見るといふことは二の次になると言えようし、焼き物の現す線や色彩は、味わいのうちに溶け込んでいるとも言えよう。焼き物の絵付けの面白さなどは、やがて飽きるものである。

私は壺が好きだ。もし焼き物に心があるなら、盃も徳利も皿も鉢も、みんな壺になって安定したい、安定したいと願っているようにさえ感じられる。古信染の壺は、特に好きだ。その「けしき」が、比類ないからだ。「けしき」という言葉も面白い言葉である。これも、実体感、あるいは材質感のなかに溶けこんだ一種の色感を指して言うものだ。信染に行った時、白い土と緑の赤松の林を見ていて、ここで山火事があったら、灰かぶりのとんでもない信染の大壺が出来るかも知れないという空想が、極めて自然に、私の心に現れた。

問 右の問題文全体を通して筆者が主張していることは何か。それを最も簡潔に表現している一文を、問題文から抜き出すとき、最適なものをおのオの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 焼き物は、見るものではない、使うものだ。
- イ 私の母親は、生前、茶道の師匠をしていた。
- ウ 例えば、この茶碗は、味がいいとか、味が悪いとか言う。
- エ 触覚という感覚は、私の感覚のうちで一番基本的な感覚に違いないという気さえ起こさせる。
- オ 焼き物の絵付けの面白さなどは、やがて飽きるものである。

【解説】

◇本文の構成

焼き物を見るものではなく使うもの

どんな焼き物が一番好きか、という問いに対しては、毎日使っているものから選ぶことになる。見るだけでなく、使い続けてみないと、その良さがわからないのが焼き物なのだ。

茶道の伝統的な美意識の影響

当世風な鑑賞を試みても、伝統的に培われた使う道が即ち器物の美しさだとする茶道の美学に、人間は自ずから従うものだ。使ううちに育つ感覚こそが、視力に優先する。

焼き物による純粋な実体感

彫刻は言葉が必要とするが、焼き物は言葉の前に、まず触覚が中心となり、視覚は二の次だ。壺が好きだが、その壺も実体感が中心であり、「けしき」と呼ばれる言葉も、触れる感覚を示すものである。

【要旨】

視力により表現から意味をくみ取る絵画や彫刻とは異なり、焼き物は、茶道が典型であるが、直接接触という実体感によりその良さがわかる。そこから、焼き物の「味」、壺の「けしき」という発想も生まれた。そんな焼き物や壺に「私」は心惹かれる。

【解答】

ア

全文通じての主張は、「焼き物は使うもの、触れるもの」である。